令和６年度島根県立大学短期大学部

学校推薦型・総合型選抜 社会人 帰国生 私費外国人留学生特別選抜

文化情報学科　小論文問題

【問題】インタビュー調査を行う研究や、フィールドワークを行う研究を「質的調査」という。質的調査に関する次の文章をふまえて、本文中のハマータウンの事例は「一見するとどのように不合理な行為に思えるか、そしてその不合理をウィリスはどのように合理的に解釈しているか」をまとめよ。そのうえで、「他者の合理性（ほかの人の意外に思える行為と、その行為を合理的に捉えることのできる理由）」について、あなた自身の具体例を挙げながら、全体を 800 字以内で論述せよ。

代表的な質的調査の例をあげて考えていきましょう。Ｐ. ウィリスが 1977 年に出版した『ハマータウンの野郎ども』です。ウィリスは 70 年代に、あるイギリスの工場街（「ハマータウン」＝ハンマーの街）の小さな高校で参与観察をおこないました。彼が分析の対象としたのは、その高校の主に二つのグループでした。ひとつは「ラッズ」（「野郎ども」）と呼ばれる不良少年たちで、もうひとつはイヤーホールズ（「耳穴っ子」）と呼ばれる、ガリ勉の優等生グループでした。

ウィリスは、学校のなかだけでなく、路上や家でもラッズの生徒たちとともに暮らして、その会話や行動ややりとりを、実に詳細に記録し分析しました。そして、70 年代イギリスの「不良少年文化」を、非常に生き生きと描き出したのです。それは、現在の日本の不良少年たちとほとんど同じような「反抗的文化」でした。かれらは授業をサボり、教師に反抗し、タバコを吸い酒を飲み、「不純異性交遊」にいそしみ、喧嘩をします。もちろん学校の勉強なんかやりません。そして真面目なイヤーホールズたちのことを徹底的に軽蔑し、バカにします。

しかし、こうしたかれらの言動や、そのもとになっている不良文化は、長い目でみるとラッズたちがよりよい大学に進学したり、よりよい学校に移動することを妨げてしまいます。結果として、ラッズの生徒たちは、その反抗的な青春を楽しみながらも、結局は学校からドロップアウトし、社会全体のなかで相対的に不利な立場を「自ら進んで」選んでしまうのです。ウィリスの問題設定は、ここにあります。なぜかれらは、自分の意思で不利になるような道に進んでしまうのでしょうか。

ウィリスの解釈は、こうです。ラッズたちは、その多くが労働者階級の出身です。かれらの父親たちは、安い賃金でハードな工場で働く、肉体労働者たちなのです。そうすると当然、家庭のなかでも、非常に「男らしい」、荒っぽい規範や価値観が支配することになります。このような雰囲気で育てられたラッズたちもまた、とても荒っぽい労働者文化に染まっています。これに対して、学校という世界は、どちらかといえば「中産階級の文化」が定着しています。中産階級の文化とは、大雑把にいえば、いまの楽しみを先延ばしして禁欲的に課題をこなすことや、丁寧でおとなしい会話や身体動作、あるいは、知的勤勉さなどが重要視されるのです。学校とは、単に知識を機械的に伝達する場所なのではありません。そこでは「特定の」文化や規範や態度が作動しています。私たちには、算数や国語という知的なゲームのための能力よりも以前に、そうした特定の文化や規範に「適応する」能力が求められるのです。

労働者階級出身のラッズたちにとって、こうした「空気」に適応することは、非常に困難で苦痛をもたらすものになります。かれらは「自然に」ふるまっているだけで、教師たちから叱られ、排除されるのです。したがってかれらが、労働者階級の文化のひとつのバリエーションである反抗的な不良文化を、教室のなかで発達させることは、当然のことであるといえます。

さて、このように考えると、ラッズたちが「自ら進んで不利な状況に入っていった」という解釈は、微妙に変わってきます。かれらの行為選択は一言でいえば「不合理」なものですが、学校という場における目に見えない文化や規範を考慮にいれると、その場に適応して真面目に勉強することの、ラッズたちにとっての「コスト」がわかってきます。知的能力以前に、学校という空間に独特の、中産階級的な「お上品な」文化に染まることは、かれらにとっては勉強そのものよりもはるかに困難なことでしょう。したがって、ラッズたちが学校から自らドロップアウトして別の道――つまり父親たちと同じようなブルーカラーの世界――を選んでしまうのは、ある意味で自然なことなのです。

もちろん、もっと長期的にみれば、よりよい学校やもっと上の大学に進学しないことは、かれらの人生にとって不利な条件として働くでしょう。しかし、かれらの労働者文化や、学校の中産階級文化を考慮にいれると、少なくとも短期的には、ラッズたちが真面目な勉強よりも反抗的な不良のライフスタイルを選んでしまうことの「理由」が分かってくるのです。

ウィリスは、自ら進んで不利な状況に入っていくラッズたちの、一見すると愚かで不合理な選択の背後に、かれら自身にとっての計算や合理性があることを見抜きました。そしてその合理性を、私たちにもよくわかるかたちで提示しました。

こうした、私たちにはあまり縁のない人びとの、一見すると不合理な行為選択の背後にある合理性やもっともな理由のことを、ここでは「他者の合理性」という言葉で表現したいと思います。社会学、特に質的調査にもとづく社会学の、もっとも重要な目的は、私たちとは縁のない人びとの、「一見すると」不合理な行為の背後にある「他者の合理性」を、誰にもわかるかたちで記述し、説明し、解釈することにあります。

出典：岸政彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016 年（一部改変）